



良質で豊富な陶土に恵まれたこの地で、先人たちは新しい技術や文化を柔軟に取り入れ、「せとものまち」を発展させてきました。

また、長年受け継がれてきたやきものづくりの卓越した技は、多種多様なやきものづくりに繋がり、陶器と磁器が共存する稀有な産地であるだけでなく、ノベルティ（置物・装飾品）、ファインセラミックスなどが生産され、今も新しいものづくりが続けられています。

先人たちより引き継がれてきた「歴史」「伝統」「文化」、そして豊かな「自然」が、今もなお、瀬戸の暮らしに息づいています。

陶都・瀬戸

千年以上の歴史を誇る
せとものまち





瀬戸焼のいろいろ

“瀬戸焼”の種類にはさまざまなものがありますが、中でも代表的なものが国の伝統的工芸品にも指定されている「赤津焼」と「瀬戸染付焼」です。



鉄釉 (てつゆう)

鎌倉時代、鬼板粘土を使用した、一般的に中性で焼成されるもの。



志野 (しの)

桃山時代、日本で生まれた初の“白いやきもの”。風化長石のみを釉薬として使用し、たっぷりと施釉して強還元で焼成したものを。



灰釉 (かいゆう)

平安時代前期にはじまり、自然釉を用いる日本最古のうわぐすり。現在は木灰(檜、楓、松)に長石・千倉(花崗岩の風化したもの)を少し混ぜて、釉薬を作る。



古瀬戸 (こせと)

鎌倉時代に生まれた鉄釉の一種。茶入れ、水指しなど茶道具に多く利用されている。



織部 (おりべ)

桃山時代、茶人古田織部の好みによって生まれたもの。土灰・長石・千倉を使用し、銅へげを加えることで深みのある緑色になる。



黄瀬戸 (きせと)

桃山時代に生まれた鉄釉の一種。酸化による焼成で、釉薬に含まれる少量の鉄が上品な黄色に発色する。



御深井 (おふけ)

名古屋城深井丸で焼かれたことに由来する灰釉の一種。



瀬戸染付 (せとそめつけ)

白地の素地にコバルト顔料による絵付けを施し、その上に釉薬をかけて焼成したもの。

豆知識 陶器と磁器の違い

やきものは大きく分けて「陶器」と「磁器」にわかれます。違いはその材料。一般的に陶器は「土もの」、磁器は「石もの」と呼ばれます。

「土もの」は主に粘土を原料とし、900～1100度で焼かれたものです。土の素朴な風合いや職人の手作業の温かさが感じられます。「石もの」は陶石と呼ばれる石の粉に粘土を混ぜたものが原料とし、1300度前後で焼かれたものです。表面が白くガラスのように硬くならぬから透光性があります。

窯垣の小径



瀬戸商工会議所

〒489-8511 愛知県瀬戸市見付町38-2 TEL:0561(82)3123 FAX:0561(83)5204
<http://www.setocci.or.jp/>

ホームページは